

歴代会長からのメッセージ

ニューガラスフォーラム設立30周年にあたって

旭硝子(株) 代表取締役会長

石村 和彦

(2012年6月～2014年6月 会長)

ニューガラスフォーラム設立30周年にあたり、まず1985年当時の設立に多大な情熱を傾けられた諸先輩方、ならびにこれまでフォーラムの運営にご苦勞をされてきた数多くの皆様に心より敬意を表したい。

筆者が会長職を拝命した2012年から2014年にかけての日本は、東日本大震災がまだまだ色濃く影を残し、長く続くデフレの影響で経済は低迷し、新政権によるアベノミクス効果に大きな期待が集まる時期であった。一方で来たる2020年のオリンピックの開催都市が東京に決定し、富士山が世界遺産の仲間入りをするなど、明るいニュースが新聞紙上を賑わせたことは記憶に新しい。

ガラスを取り巻く産業界に目を向けると、2012年にはいよいよ地上アナログ放送が全て終了し、デジタル放送への移行が完了した。ブラウン管から薄型テレビへの買い替え需要はひと段落し、液晶ディスプレイはテレビの主役としての地位を確立した。これに伴い、液晶用の基板ガラス市場も成熟期に入ってきた感がある。一方でスマホに代表される新たな携帯デバイスは人々の日常生活に急速に浸透し、これらに使われる化学強化ガラスはその需要を一気に拡大した時期であった。

ニューガラスフォーラムはその設立の趣旨である、ニューガラス産業の発展を目指して着実に歩を進めた時期であったと言える。ガラス産業連合会（GIC）の一員としても、各ガラス業界団体と様々な情報交換を通して活動を継続した。2005年から始まったGICガラス技術シンポジウムは2014年に、数えて10回目の節目（GIC10）を迎えた。本シンポジウムは毎年日本セラミックス協会が主催する「ガラスおよびフォトンクス材料討論会」と合同で行われているものであり、まさにガラス技術における産・官・学連携強化に大きな役割を担っている。ニューガラスフォーラムは本会の運営の事務局として大きな役割を果たしてきたと自負している。

今後のフォーラムのあり方はどうであろうか。30年前の設立の時代からすると、フォーラムを取り巻く環境も大きく変化している。GIC10においても大いに議論されたが、グ

ローバル化はその最たる課題であろう。中国を始めとする新興国の台頭は目覚ましく、従来の延長では技術立国としての日本そのものの地位が脅かされる時代となっている。30周年はフォーラムにとっても「継続は力なり」に加えて、新しい視点に立った取り組みを益々期待したい。